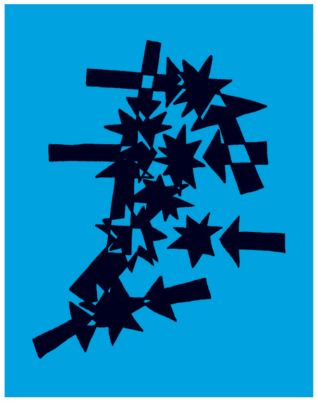
THE ECONOMICS BOOK

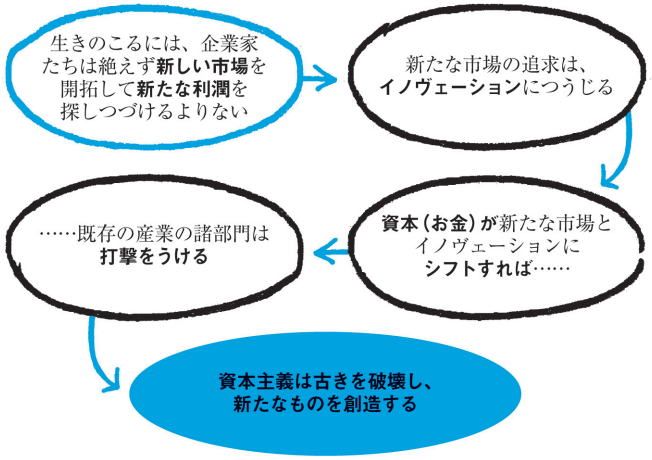
見やすい紙面、わかりやすい解説

経済概念　タイトル　図解（マインド・マップ）　参照項目　キーとなる言葉　略伝



資本主義は古きを破壊し、新たなものを創造する

創造的破壊



その経済学的背景

焦点
経済体制

鍵となる思想家
ヨーゼフ・シュンペーター
（1883～1950年）

前史

1867年　カール・マルクスが、資本主義は危機によって前進し、繰りかえしすべての範囲の生産力を破壊すると主張する。

1913年　ドイツの経済学者ヴェルナー・ゾンバルトが、ちょうど材木の欠乏が石炭の使用につながったように、破壊が創造への新たな道を切りひらくと主張する。

後史

1995年　アメリカの経営学者クレイトン・M・クリステンセンが、破壊的イノヴェーション（革新）と維持的イノヴェーションを区別する。

2001年　アメリカの経済学者リチャード・フォスターとサラ・カプランが、どれほど常軌を逸した法人であっても、資本主義市場を無期限に打ちのめすことはできないと主張する。

景気後退が襲ってきて、企業も仕事も減りはじめると、そうした状況に歯止めをかける介入を政府に求める声があがる。オーストリアの経済学者ヨーゼフ・シュンペーターは、1930年代の世界大恐慌の真っ只中で著述をおこない、そうした声を批判した。シュンペーターによれば、景気後退は資本主義がどう前進しているかをじかに示す現象であって、もともとはカール・マルクス（105頁）が「創造的破壊」と呼んだ、無効果なものを排除して新たな成長への地ならしをするできごとだ。

シュンペーターの考えでは、資本主義の成長の中核をなすのは企業家だ。アダム・スミス（61頁）が資本の配当から利潤を生じるのを認め、マルクスが、労働の簒奪から利潤の生じるのを認めていたのにたいして、シュンペーターは、利潤はイノヴェーションから来ると主張した。イノヴェーション自体は、資本に由来するのでも労働から生まれるのでもない。シュンペーターは企業家を、新たな階層の人間、資本家とも労働者階級ともちがうその外部にいる「成りあがり者」、発明をなし、不確定な条件の下で新たな製品と生産のかたちを創造する存在とみなした。

企業家の経済活動への創造的応答をつうじて、企業家自身が変化し、些細な経済的変化に「適応的応答」をなしうる、既存の企業の所有者の外部に立つ傑出した存在となる。自身のイノヴェーションを市場に導入する必要に迫られて、企業家たちは抵抗に出くわすリスクを負わざるを得なくなる。彼らは旧体制を打ちこわし、利益をあげる新たな機会をこじあける。シュンペーターの考えでは、イノヴェーションはスミスの考えた「見えざる手」もしくは自由市場の競争よりもはるかに効果的に新市場をつくりだす。

飛躍

シュンペーターによると、新たな市場はイノヴェーションの洗礼を受けた後で成長するが、ほかの市場もすぐにそれを模倣し、最初の革新者の利潤のおこぼれに与ろうとする。やがて市場は停滞する。景気後退は、ふたたび前進するための格好の機会であり、その過程が苦しみに満ちていても燃えつきた材木を洗いながす。近年では、アメリカの経営学者クレイトン・M・クリステンセンに代表される経営戦略家が、二種類のイノヴェーションを区別する。「維持的」イノヴェーションは、文字どおり現在稼働中のシステムを維持し、しばしば技術的な改良というかたちを採る。他方で「破壊的」イノヴェーションは、市場を転覆させ、事態を揺りうごかして生産のイノヴェーションをつうじて市場を変える。たとえば、デジタルの音楽プレイヤーの技術を発明したのはアップルではなかったが、デザインの洗練された製品（iPod）を音楽ダウンロードプログラム（iTunes）と結びつけて、音楽を聴く新しいやりかたを創出したのはアップルの功績だ。

マルクスの考えでは、創造的破壊は資本主義に莫大なエネルギーをもたらすが、それ自体を破壊する爆発的な危機をももたらしかねない。シュンペーターはそれに同意しつつ、資本主義が自己を破壊するのはその成功のゆえであって失敗からではないと主張した。シュンペーターは独占をイノヴェーションのエネルギーとみなしたが、それはどこまでも成長して並外れたスケールの法人企業となるしかなく、その官僚主義は最後にはみずからに生命を与える企業家精神自体の息の根を止めてしまうとも述べていた。■

アップルのiPhoneは先見の明のあったアメリカの企業家スティーヴ・ジョブズによって導入された。それは産業の「ゲーム・チェンジャー」であり、競争相手をそれに対抗しうる製品の創造へと追いたてた。

> 新たな製品と新たな手法は、旧来のそれと対立する……が、それは同等の観点ではなく、ある決定的な優位に立ってのことで、たいていそれは後者の死を意味する
>
> **ヨーゼフ・シュンペーター**

参照　自由市場経済学→54～61頁 ■ 好景気と不況→78～79頁 ■ マルクス主義経済学→100～105頁 ■ 技術的躍進→313頁

ヨーゼフ・シュンペーター

1883年に当時オーストリア＝ハンガリー帝国の一部であったモラヴィアで生まれたヨーゼフ・シュンペーターは、ドイツの工場経営主の息子であった。父はシュンペーターが4歳のときに亡くなり、シュンペーターは母に連れられてウィーンへ移りすんだ。かの地で母親は上流階級のウィーンの将軍と再婚し、その助けでシュンペーターは若き経済学の俊秀としてめざましいキャリアを積んでゆく。その過程でシュンペーターは、経済学の教授、オーストリアの大蔵大臣、ビーダーマン銀行の総裁を歴任した。

1924年に銀行が破産して、オーストリアとドイツがナチズムに屈したのち、シュンペーターはアメリカへ亡命し、ハーヴァード大学で講義を受けもつ。そこで少数ながら熱狂的な弟子たちを育て、1950年に66歳で亡くなる。

主著

1912年『経済発展の理論』
1939年『景気循環論』
1942年『資本主義・社会主義・民主主義』
1954年『経済分析の歴史』

経済学の背景　小見出し　図版解説